

## 色々な顔を見せる

### 中南津軽の温泉郷

中園 裕

(地域生活文化課  
県史担当総括主幹)



大鰐温泉の客舎群。1988(昭和63)年11月27日・佐藤正治さん撮影・青森県所蔵県史編さん資料

青森県には数多くの温泉があるが、その多くは中南津軽地方に存在する。実際に、浅瀬石川流域には黒石温泉郷、平川流域には大鰐碓ヶ関温泉郷があり、どちらも温

泉郷自体が県立自然公園に指定されている。このほかに岩木山麓には嶽温泉や百沢温泉もある。

嶽温泉は、弘南バス「嶽温泉前」のバス停を取り巻くように旅館が並ぶ。いずれも内風呂を備えているが、それは1959(昭和34)年にボーリング泉源の開発に成功してからのこと。以前は各旅館に内風呂はなく、宿泊客はバス停の場所にあった共同浴場を利用していた。

共同浴場の周辺に並ぶ内風呂のない宿泊施設を客舎という。嶽温泉の場合、かつての客舎が、ほぼそのまま旅館になったので、今も湯治場の雰囲気を残している。

黒石市の温湯温泉は、集落の中央に共同浴場があり、周りを旅館や客舎が取り囲む典型的な湯治場だ。後藤・盛萬・土岐の各客舎は、湯治が盛んだった頃とあまり変わらな

飯塚旅館も、かつては飯塚客舎として多くの湯治客を泊めていた。女将の飯塚幸子さんによれば、半地下に建っていた以前の共同浴場は、屋上を益踊り会場の舞台に使われていたとのこ

と。女将たちが屋上で踊り手になり、湯治客が宿の2階から見物して楽しんだそうだ。湯治という言葉からわかるように、温泉は療養や保養の場でもあった。事実、戦前の碓ヶ関温泉には傷痍軍人転地療養所が設置され、将兵たちが心身を癒

橋の近くで、現在の碓ヶ関温泉会館あたりである。しかし碓ヶ関温泉といえば、平川の河川敷に造られた温水プールと洗濯場が、地元住民たちの語り草だ。当時、温水プールは大変珍しく、県内各地から子

連れの家族が訪れ、プールはイモ洗い状態だった。温泉が湧き出る洗濯場は、冬場でも手が荒れずにすみ、主婦たちの格好の社交場だった。平川市の平賀地区には新興の温泉施設が数多く存在する。1960年代以降、黒鉱開発が盛んに実施され、その過程で湧き出た温泉を入浴可能な施設にしたから、公民館施設を兼ね備え

た大坊温泉、温泉プールのあった南田温泉など、大小さまざまの温泉施設が、今も多くの人々に利用されている。

遊興的要素の強い大鰐温泉も、かつては湯治利用が当たり前で、街中には旅館や民宿の他に客舎が数多く並んでいた。面白いことに、大鰐温泉は客舎にも内湯があった。嶽や温泉とは異なり、共同浴場も複数あり、御馳走を提供する旅館も存在した。多種多様な選択肢があったのである。

大鰐温泉にはスキー客が大勢訪れ宿泊した。彼らは湯治客とは異なり、その日の気分に合わせて共同浴場や内湯を選び、入浴を楽しんだと思う。その後、仲間と一緒に食堂や居酒屋へ立ち寄り、時にスナックでホステスさんと語り合うこともあっただろう。大鰐温泉は異色の湯治場だったのかもしれない。

中南津軽の温泉は多種多様な個性な施設が数多く存在することは、温泉の豊かさを象徴している。しかし後継者不足や経営難によって閉鎖した施設が多くなったのも事実。温泉施設は経営者の努力だけでは成り立たない。利用者である我々が常に利用し続け、大切にしていくなが必要があると思う。